

[7]

氏名	吉津潤 <small>よしづ じゆん</small>
博士の専攻分野の名称	博士(心理学)
学位記番号	心博第11号
学位授与の日付	平成25年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	感情調節のプロセスモデルと感情抑制
論文審査委員	主査教授 雨宮俊彦 副査教授 関口理久子 副査教授 串崎真志

論文内容の要旨

本論文では、感情調節のプロセスモデルを理論的背景として開発された ERQ (Emotion Regulation Questionnaire) 日本語版の作成が行われ、認知的再評価方略（以下、再評価方略）と感情表出抑制方略（以下、抑制方略）が **well-being** にどのような影響を与えているのか検討がなされている。再評価方略は、諸外国の先行研究と一致して **well-being** に一貫してポジティブな影響があることが示された。一方、抑制方略は、欧米の先行研究では **well-being** へは明確にネガティブな影響が示されてきたが、本研究では **well-being** への明確なネガティブな影響は示されなかった。この違いに関して、感情抑制に関する価値観や社会的感受性の介入があるのか、調査が行われ、抑制方略の **well-being** への影響に対し、感情抑制に関する価値観が影響を与えている可能性が示唆された。この結果について、アジア文化における感情抑制と **well-being** の関係に関する先行研究を参照しての考察がなされた。

以下、論文の各章の内容をごく簡単に紹介する。

序章：はじめに

序章では、本論文の目的と構成が示され、本論文で使用する感情調節に関する用語についての検討がなされている。Emotion Regulation の”Emotion”は「感情」、「情動」の訳が、”Regulation”は「制御」、「統制」、「調整」、「調節」の訳が可能である。実際 Emotion Regulation に関しては「感情制御」、「感情統制」、「感情調節」、「情動制御」、「情動調整」の訳語が使われている。本論文で「感情調節」の訳語を採用した理由について、序章では入念な検討に基づき、以下のように説明されている。まず、Process Model of Emotion Regulation における”Emotion”に関しては、日本語の「情動」よりもより幅広く「感情」を対象としたものであり、また一般的な学術用語の訳語としても「感情」が適切である。次に、Process Model of Emotion Regulation では”Regulation”を感情生起過程に内在した過程としてとらえているので、”Regulation”の訳語としては、外からの目標値の設定というニュアンスのより少ない「調節」が望ましい。

第1章：感情調節に関する先行研究

第1章では、感情調節のプロセスモデルの源泉となった、感情のプロセスモデル、自我防衛機制研究、ストレスコーピング研究について概観が行われている。その結果、従来の様々な感情理論を包摂した感情のプロセスモデルにおいては、感情過程が大きく感情生起と反応の二段階に分類されうることが確認された。また再評価方略を初めとして、**well-being** に影響を与えるとされる種々の感情調節方略が、防衛機制やストレスコーピングなどにおける先行研究を受けて定式化されたものであることが示された。

第2章：感情調節のプロセスモデル

第2章では、感情調節のプロセスモデルについての概観がなされている。感情調節のプロセスモデルでは、種々の感情調節方略が、感情生起の各段階に即して分類される。感情生起までの段階における感情調節方略は先行焦点型感情調節と総称され、感情生起後における感情調節方略は反応焦点型感情調節と総称される。先行焦点型感情調節の代表的な方略は再評価方略である。反応焦点型感情調節における代表的な方略は抑制方略である。**Gross** らは、再評価方略と抑制方略の使用が気分や感情、種々の生理的指標などに与える影響について一連の実験的研究を行い、感情生起以前に行なわれる再評価方略を使用する方が、感情生起以降に行なわれる抑制方略を使用するよりも、心身の健康に適応的な結果をもたらすことを示している。このような実験結果をふまえ、感情調節方略の使用の個人差を測定する尺度として **ERQ** が開発された。**ERQ** を使用した調査や実験の結果からも、再評価方略の使用は、社会関係や **well-being** にポジティブな影響を与えるが、抑制方略の使用は社会関係や **well-being** にネガティブな影響を与えることが示されている。しかし、アジア文化においては、抑制方略は社会関係や **well-being** への明確なネガティブな影響は示されず、抑制方略が社会関係や **well-being** に与える影響について、文化差の存在が示されている。

第3章：感情調節尺度日本語版の作成

第3章では、**ERQ** の日本語版 (**ERQ-J**) を作成し、その信頼性と妥当性の検討をおこなっている。**ERQ-J** の因子構造は、**ERQ** と同じく、再評価方略 6 項目と抑制方略 4 項目からなる 2 因子構造であることが、3 つの異なった参加者グループにおいて確認された。内的整合性および再検査信頼性も十分な値が得られ、**ERQ-J** の二下位尺度は十分な水準の信頼性を持つ尺度であることが示された。また、妥当性を確認するために行った他の尺度との関連に関しては、再評価方略の場合、先行研究と同様に **well-being** とポジティブな関連が示されたものの、抑制方略の場合 **well-being** との間にネガティブな関連は示されなかった。

第4章：感情調節のプロセスモデルに関する検討

ERQ は、感情調節のプロセスモデルにおける 5 つの感情生起ポイントのなかの認知的変化と反応調整の 2 つのポイントのみに関し、方略使用の個人差を測定するものである。第4章では、**Schutte, Manes, & Malouff. (2009)** の質問紙を日本語訳し、5 つの感情生起ポイントすべてについて、また反応調整については三側面について、方略使用の個人差の

測定を行っている。測定される方略は、先行焦点型感情調節として、状況選択、状況修正、注意配置、認知的修正の4つ、反応焦点型感情調節として経験的反応調整、行動的反応調整、身体的反応調整の3つの合計7つである。7つの下位尺度の信頼性は経験的反応調整と行動的反応調整以外は十分な水準であった。認知的修正は ERQ の再評価と高い相関を示し、状況修正、注意配置、認知的修正は共に well-being に関する尺度とポジティブな関連を示した。状況選択以外の先行焦点型感情調節方略については、Gross らが主張するように well-being へのポジティブな影響が確認されたと言える。一方、反応焦点型感情調節に関する3つの下位尺度に関しては、ERQ の抑制方略とも well-being 関連の尺度とも明確な関連は示さなかった。反応焦点型感情調節は Gross らが想定するよりも、複雑な過程かもしれない。

第5章：感情抑制の目的と方略

感情調節のプロセスモデルは、感情調節方略を感情生起のどの段階で行う方略かという観点から位置づけるが、方略使用の目的や理由は扱っていない。ERQ も同様である。第5章では、抑制方略と well-being の関係の検討をより具体的に行うために、感情抑制の理由（目的）について、自由記述による調査をおこなった。調査の結果、社会的規範の遵守、対人配慮、目標達成、自尊心などの適応的な理由（目的）がみいだされた。また、最も抑制される感情は怒り感情であり、抑制の方略には、自制、忍耐、反対の行為、再評価などがあげられた。これらの結果から、感情抑制の理由（目的）には適応的なものが多く、個人の価値観が反映していることが示唆された。

第6章：感情抑制の価値観と well-being

第5章の結果から、抑制方略は適応的な目的のもとに行われることが多いことが示唆された。抑制方略が well-being に対し明確にネガティブな影響を与えないのは、抑制方略使用そのものだけではなく、方略使用の目的や方略のとらえ方にもよっている可能性がある。そこで第6章では、抑制方略が well-being に対して与える影響に、感情抑制に対する価値観がどのような調整効果を及ぼしているのか、適応的な感情抑制方略の使用と関連していると考えられる社会的感受性による調整効果も含めて調査を行った。調査の結果、well-being の一側面である本来感について、調整効果が確認された。第一は、抑制方略の使用と抑制に関する価値観との整合性による効果で、感情抑制の価値観と抑制方略の使用が一致している場合、本来感が高まる。またコミュニケーション・スキルが不足していても、抑制方略の使用が多いと、本来感が高まる調整効果も示された。価値観が関与した調整効果を感情抑制価値観一致効果、コミュニケーション・スキルが関わる調整効果をコミュニケーション・スキル不足カバー効果と行うことができるだろう。これらは、抑制方略が抑制の価値観やコミュニケーション・スキルと相互作用し、well-being に影響する例である。

第7章：全体的考察

感情調節のプロセスモデルには、一般性、感情生起過程への着目、一方向モデルという3つの特徴のあることが指摘された。感情調節のプロセスモデルは、複雑な感情調節過程

を十全にモデル化したとは言えないが、その解明に向けて複数の分野の研究が共同する基盤を提供することができる有用なモデルであることが確認された。

本研究では、アジア諸国における先行研究の結果と一致して、抑制方略は **well-being** に対し明確にはネガティブではなかった。この理由を解明するために行われた、感情抑制の目的に関する調査では、抑制方略は全般に対人配慮、目標達成などの適応的な理由のもとに行われていることが示された。また、本来感への感情抑制の影響に関して、価値観との関連での感情抑制価値観一致効果、コミュニケーション・スキルとの関連でのコミュニケーション・スキル不足カバー効果がみいだされた。これらはまだ断片的な手がかりに過ぎない。本来感以外の **well-being** の指標を従属変数としたときには、交互作用が示されなかったのはなぜかなど、多くの問題が残されている。感情調節のプロセスモデルを基盤として、抑制方略を価値観や文脈のもとに位置づけ評価していくことによりモデルの制約を補い、抑制方略が文化によってなぜ異なった **well-being** の帰結をもたらすのかについて、その背景にあるしくみを明確にしていくことが可能かは、今後の課題である。

論文審査結果の要旨

感情調節に関しては、ストレス対処や心理療法との関連で、別々の枠組みの中で早くから研究が行われてきた。1990年代以降は、これらの研究は感情調節というひとつの領域とし互いに関連づけられるようになり、研究は急激な増加を示している。この研究の活発化において、中心となる役割を果たしてきたのが Gross らによる感情調節のプロセスモデルである。日本でも Gross らによる感情調節のプロセスモデルへの言及はなされるようになってきたが、実験的研究と尺度を用いた調査研究を併用して構築されてきたプロセスモデルについて、実証的な観点から本格的に検討した研究はほとんどない。

本論文の第一の意義は、実証的な研究の観点から、感情調節のプロセスモデルの紹介を行っていることである。紹介においては、実験的研究、尺度を用いた調査の双方の研究の蓄積が十分に踏まえられており、プロセスモデルの制約も明確に指摘されている。第二の意義は、ERQ の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を確認したことである。ERQ は現在 27 カ国語の翻訳が Gross のホームページに公開されており、日本語版としては本論文で示された ERQ-J が採用されている。ERQ-J は、すでに一部の心理学の教科書にも掲載されており、今後、幅広く使われていくとことが期待される。第三の意義は、欧米での結果との違いが示された抑制方略が **well-being** に与える影響に関して、抑制の目的や理由に関する自由記述調査、抑制が **well-being** に与える影響への、抑制の価値観や社会的感受性による調整効果の質問紙調査による検討など、丹念に実証的な追求を進めていることである。抑制方略が **well-being** に与える効果において示された、欧米との違いは、まだ解明されるまでにはっていないが、感情調節のプロセスモデルに基づきながらも、その制約を明確に意識し、制約を補う形で追求することにより、解明の方向性は示せたと言えるだろう。以上の三点は、本論文で示された研究が、日本における感情調節研究の進展に大いに寄与する価値を持つことを示している。

論文の構成は、感情調節のプロセスモデルを柱に、プロセスモデルの制約も踏まえ、抑制方略の評価を行っており、理論の検討と実証研究が対応する形で論理的に展開されている。文章は平明で、データ分析も丁寧に行われている。文献探索も幅広く適切な引用がなされている。

以上の点から、本論文を博士論文として価値あるものと認める。